

## 研究結果

旧韓末から日本帝国の植民地時代まで、韓国仏教は旧来の朝鮮仏教の伝統とともに日本仏教の影響を受け、近代仏教への志向を進んでいった思想的流れが共存していた。後者の場合、二つのルーツがあった。一つは日本仏教の朝鮮進出を通じた刺激、もう一つは韓国の僧侶達が直接的な日本留学を通じて近代仏教学との出会いから始まった。

開港以後、浄土真宗、曹洞宗を中心として朝鮮に入ってきた日本の僧侶達は、帝国主義の先鋒として役割もあったが、近代文学の移植という結果をもたらすことになった。権尚老による新たな朝鮮仏教史の整理、仏教学の提示、そして仏教雑誌の刊行などとともに白龍城の仏教經典の韓国語への翻訳事業などは日本近代仏教の刺激と影響と深く関わる。

後者の場合、金泰洽、許永鎬など新たな僧侶達において1920年代以後活発に行われていた日本留学を通じてもたらされていた。彼らは個人のアイデンティティの認識問題、近代哲学の主な思想を仏教と比較する問題に関する談論を提示しながら、従来の厭世観的仏教から進歩的、実践的仏教への転換を模索していた。だが、これらの論議や実践の理論や方法論は殆ど日本からの影響という限界があった。従って、太平洋戦争以後急激な所謂親日仏教、皇道仏教への傾斜という結果になった。

## 研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等) :

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等) :

「許永鎬の近代仏教の受容と遊学経験」 港都釜山 2009年 (趙 明済)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等) :

「中外日報の朝鮮仏教関係記事資料集」 2009年